

< 発表要旨 1 >

新たな君主到来のメッセージ
ヘラルト・ダーフィット作《森林》《キリスト降誕》三連画試論

藤村拓也（九州大学大学院博士課程）

ネーデルラントにとって 15 世紀末から 16 世紀初頭は、シャルル突進公の死により栄華を極めたブルゴーニュ公国が終焉をむかえ、支配者の座がハプスブルク家へと移った一大転換期であった。そのような中、ブリュッヘを中心に活動したヘラルト・ダーフィットは、激動の時代とは相反するかのような牧歌的な雰囲気をもつ《森林》を遺している。

繁茂する木々が一面に描かれた《森林》は、かつて初期ネーデルラント絵画史上初の純粋な風景画と称されていた。しかし、その縦長の二分割された形状から察せられるように、《森林》は本来、メトロポリタン美術館所蔵の《キリスト降誕》三連画の外翼パネルを構成していたのである。それゆえ 1990 年代以降、《森林》を純粋な風景画とみなす制度化された眼差しへの批判に立脚し、この特異な外翼パネルを 画家の標章、『イザヤ書』を典拠とする「キリスト降誕」の予型論的解釈、当時の宗教実践の反映、とする説が提唱されている。ただし、注文主や本来の設置場所をつたえる一次資料が発見されていないため、未だ定説といえるものはない。

また開閉式三連画にとって最も重要な箇所は中央パネルであるにもかかわらず、《森林》の内側に描かれた《キリスト降誕》が等閑視されてきたことも問題点として挙げられよう。畢竟するに、特異な外翼パネル《森林》の意味内容は、内側の《キリスト降誕》を中心とした三連画全体の図像プログラムを視野にいれ再考したとき、初めてかたちを成すものと考えられるのである。

そこで本発表では、まず「キリスト降誕」を中心主題とする初期ネーデルラント絵画の開閉式三連画を考察し、《森林》《キリスト降誕》三連画の比較材料とする。とりわけ三連画全体の図像プログラムと個々のモチーフが、注文主や設置場所というコンテキストと如何にして関連していたかを中心に考察を進めたい。次に一次資料の欠如を補うべく、15、16 世紀ネーデルラントの視覚文化において「キリスト降誕」や「森林」の図像がどのような意味内容を持ち合わせていたかを検討する。

以上をふまえ、当時ブリュッヘが置かれていた社会的状況を意匠とし、様々なモチーフによって紡ぎ出される意味内容が、ひとつの三連画のなかで編み出すメッセージに耳を傾けてみたい。

< 発表要旨 2 >

貝殻の上のシュルレアリスム
ロンドン・シュルレアリスム国際展（1936年）をめぐって

石井祐子（九州大学大学院人文科学研究院）

ブルトンがシュルレアリスムの「客体化」と「国際化」を宣言した1年後、その運動の展開上初めてとなる包括的なシュルレアリスム国際展がロンドンで開かれる。（以下、「ロンドン・シュルレアリスム国際展」と表記する。）この展覧会は、イギリスにおけるシュルレアリスム受容のみならず、以降次々に行われるようになる大規模なシュルレアリスム展の幕開けとも位置付けられる。しかしながら、本展覧会は以下に述べるその性格上、これまであまり「シュルレアリスム的」ではないと評されてきた。実行委員にブルトンやエリュアールといったシュルレアリスムの中心メンバーが名を連ねているにもかかわらず、である。本発表では、30年代以降のシュルレアリスム運動の国際化と展覧会活動の隆盛の流れの中にロンドン・シュルレアリスム国際展を位置付け、その組成の展開や展示空間の問題を再検証・考察することを目的とする。

ロンドン・シュルレアリスム国際展は、ロラン・ペンローズやポール・ナッシュ、ヘンリー・ムーアといった芸術家たちにハーバート・リードを加えたイギリス側委員会と、ブルトン、エリュアール、マン・レイなどから成るフランス側委員会との協働によって実現した展覧会である。ただし、パリ・シュルレアリスム周辺の作家を選出するのを除き、会場設営案や広報など、実質的な運営に携わったのは専らイギリス側委員会であったようだ。そして、今日残された資料（イギリス側委員会の議事録や記録写真、書簡等）を確認すると、しばしば指摘される「サロン風」の展示や奇妙な集合写真、積極的な広報活動の中に、のちにブルトンが直面せざるを得なかった「正統的」シュルレアリスムの変容の萌芽を看取することができる。しかしながら、こうした「変容」は、パリ・シュルレアリスム運動それ自体の中に起因するものであり、また後にシュルレアリスム運動の内外で相互作用しつつ再生産されてゆくものでもあった。そういう意味で、1936年のロンドン・シュルレアリスム国際展は、その語の指し示す射程の未だ定まらないようにみえる「シュルレアリスム的展覧会」とは如何なるものであるのかを再考察する上で重要な一例であると言える。